

本発表では、まず本文を一行空きの部位で五つの小段に区切り、それを一・二段と三・四段の都合三部に分ける。次に、内容を順に追いつながら〈彼〉の〈アンナ〉に対する気持ちの変遷に着目する。その中で、〈蝙蝠〉〈矢守〉〈犬〉〈鳥〉といった動物の比喩表現が〈彼〉と会話が成立しない他者を表す場合に用いられるが、第五段では〈彼〉と言葉を交わした〈少年〉には用いられていない。これは〈彼〉と他者との動的距離を表すと同時に、心的距離をも表しているものである。以上の視点から、第五段落での〈彼〉のつぶやきの中に、「日本人アンナ」という言葉の感慨を見る。

## 《中国学》

### 進鴻溪の詩風と思想に就いて

——『鴻溪遺稿』の詩文を中心として——

博士前期課程二年 菊地 誠 一

進鴻溪（一八二二〔文政四〕—一八八四〔明治十七〕年、諱は漸、字を于達、幼名は和作、長じてからは昌一郎と称す。鴻溪はその号、他に鼓山・祥山・歸雲とも号し、晩年は祥山が通称）は、山田方谷門下で、本学の創立者三島中洲とも同門であり、本年が没後一百二十年にあたる人物である。

鴻溪の一生は、幕末維新の動乱に際して藩の内外に奔走していた時期を境として、その前後を師の方谷や同門の中洲と同じく「教育」

に従事していた。中洲は、鴻溪の風格について「温和にして勤飭、善く人と交はる。躬肥へて腹はり、豪飲數斗なるも亂れず。酔へば則ち笑聲四隣に徹す」（『墓碑銘』）と記し、学問について「學は朱王を奉じ、詩文を善くす」（前同）と表現し、方谷門下での位置を「方谷之を啓き、鴻溪之を紹ぐ」（前同）と顕彰した。

本発表では、鴻溪の一生について素描した上で、詩風と思想一般について考察すべく、進鴻溪の遺書である『鴻溪遺稿』を中心に扱う。また、思想一般においては、鴻溪の心学的傾向についても言及してみたい。